

同窓生シリーズ

(18)



第28回生 上柳昌彦氏

昭和32年 大阪生れ
昭和51年 本校卒業
立教大学 法学部卒業
ニッポン放送編成局制作部主任
現在の担当番組「高島ひでたけお
はよう中年探偵団」(木曜 6時35分
でたこと新聞コーナー)「タモリの
週刊ダイナミック」(土曜 3時の疑
問コーナー)

学園紛争の名残りが微かに感じられた昭和四十八年の春入学しました。入学早々配られた生徒会誌の表紙は、白地に赤で「轍」の一文。めくってみると「恨みは晴さずおくべきか」「連帯を求めて孤立を恐れず」などと過激な標語が目飛び込んできました。びっくりしながら他の頁を開けば、今度は新宿高校周辺の全ての喫茶店の地図が載っていたりで、「とんでもない学校へ来ちゃったなあ、でも皆大人なんだな」と思いました。

僕が初めて人前で喋ったのは臨海学校の最終日、方が、より大きな喜びで、

二年生で、なりました。七十年代のアメリカ映画をパロディ化した作品をハミリに撮りました。この時も、音声で行き詰まっていたら、先生が僕

サードで、なりたければ大学へ行った方がいね」と教えていただきました。この大真面目な話が交された場所はなんとトイレでした。それで勉強の方はといえば、学園祭ほどの情熱を注がなかったで、一年後に大学の門をくぐりました。再び進路決定を迫られた大学四年の時、あの日の光景が脳裏をよぎり、やるだけやってみようというアンウンサーに挑戦しました。採用を知って、改めて先生の御蔭だと思ひ感謝の意を伝えるべく報告したのですが、先生はすつかり忘れておられました。先生のご記憶云々とはともかく「僕がアンウンサーになった理由」を語るのに、必ずご登場いただきたく有元先生との出会いが、この新宿高校にありました。

喋りが人よりうまいのではないかと思つて、ア

かしく芸大会の司会をくじで当てたときでした。僕の話が皆に結構うけることを知り「これは気持ちのいいものだなあ」と思いました。まもなく学園祭を迎えて僕のG組は「ロミオとジュリエット」を面白可笑しく人形劇で演じる事になりました。ナレーションはどうするか、というときに「館山の司会、面白かったから読んでみたら」と担任の有元先生にいわれて、アドリブを交えて演じました。臨海の司会を覚えていらしたのも嬉しかったのですが面白いから、それを生かした仕事に就いたらどうだ。例えばアナウンサーもそうで、なりたければ大学へ行つた方がいいね」と教えていただきました。この大真面目な話が交された場所はなんとトイレでした。それで勉強の方はといえば、学園祭ほどの情熱を注がなかったで、一年後に大学の門をくぐりました。再び進路決定を迫られた大学四年の時、あの日の光景が脳裏をよぎり、やるだけやってみようというアンウンサーに挑戦しました。採用を知って、改めて先生の御蔭だと思ひ感謝の意を伝えるべく報告したのですが、先生はすつかり忘れておられました。先生のご記憶云々とはともかく「僕がアンウンサーになった理由」を語るのに、必ずご登場いただきたく有元先生との出会いが、この新宿高校にありました。

ナウンサーになったのですが、プロの道は厳しく、新人の頃は失敗もしました。人知れず努力もしたのだと思いますが、その頃の辛さ苦しさはもう忘れてしまいました。ラジオの性質上、視覚に訴えられない分、表現にどのようにより、どんな想像をさせたのかを考へるのは楽しいことです。今でも難しいのはゲストのインタビューで、一通り以上の話を聞き出し、更に僕との話を聞き出し、更に僕との話が一番良かったと思つてもらいたいので、それがうまくいくか否か、かなり緊張する作業でもあります。職業柄、沢山のひとを知り合え、思いがけない体験もしました。印象に残るもの一つに映画「稲村ジェーン」に出してもいい、映画の撮影現場というものを実際に見た、ということがあります。

だと思つています。